教材におけるスキャフォールディングと教師によるスキャフォールディング

－CLILによる日本語教材開発に向けて－

首都大学東京　奥野由紀子
東京工業大学　佐藤　礼子

はじめに

PAX MUNDI PER LINGUAS
－言語を通して世界の平和を－

- 約10年前から、世界の貧困や紛争、平和の問題を「内容」として取り上げた授業「ピースプログラム in Japanese」を留学生向け日本語科目で実施。

↓

この間に世界の情勢は大きく変化・・・

実践のコンセプト「PEACE」

縫部（2009）が「関わり」に焦点をあてた日本語教育を進めるうえで提唱した概念

P ： Poverty　貧困からの脱却
E ： Education　教育
A ： Assistance in need　自立のための援助
C ： Cooperation & Communication　協働と対話
E ： Environment　環境

「PEACE」をテーマにして読解・視聴・発表活動・ディスカッションなどの言語活動・協働活動を行うことで、

- 地球上・自国内で起こっていることを自分の問題（当事者）として捉える。
- 今後生活する社会や世界でのよりよい生き方を模索する。
- 社会のしくみや知識を問い直す姿勢、何が必要かを考える姿勢、自分に何ができるのか考え社会とかかわる姿勢、発信する力をもってほしい。

これまでの取り組み

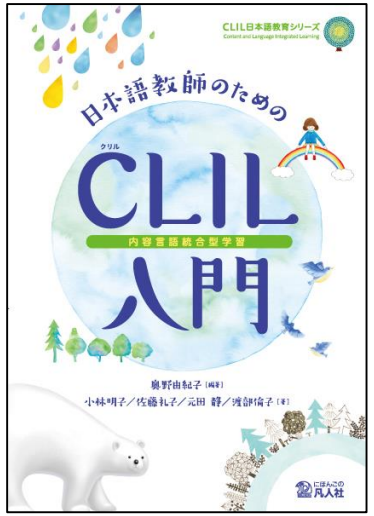
- CLILの有効性が指摘されるようになり、それまでの実践にCLILの枠組みを取り入れ、実践方法を調整・学習活動を追加

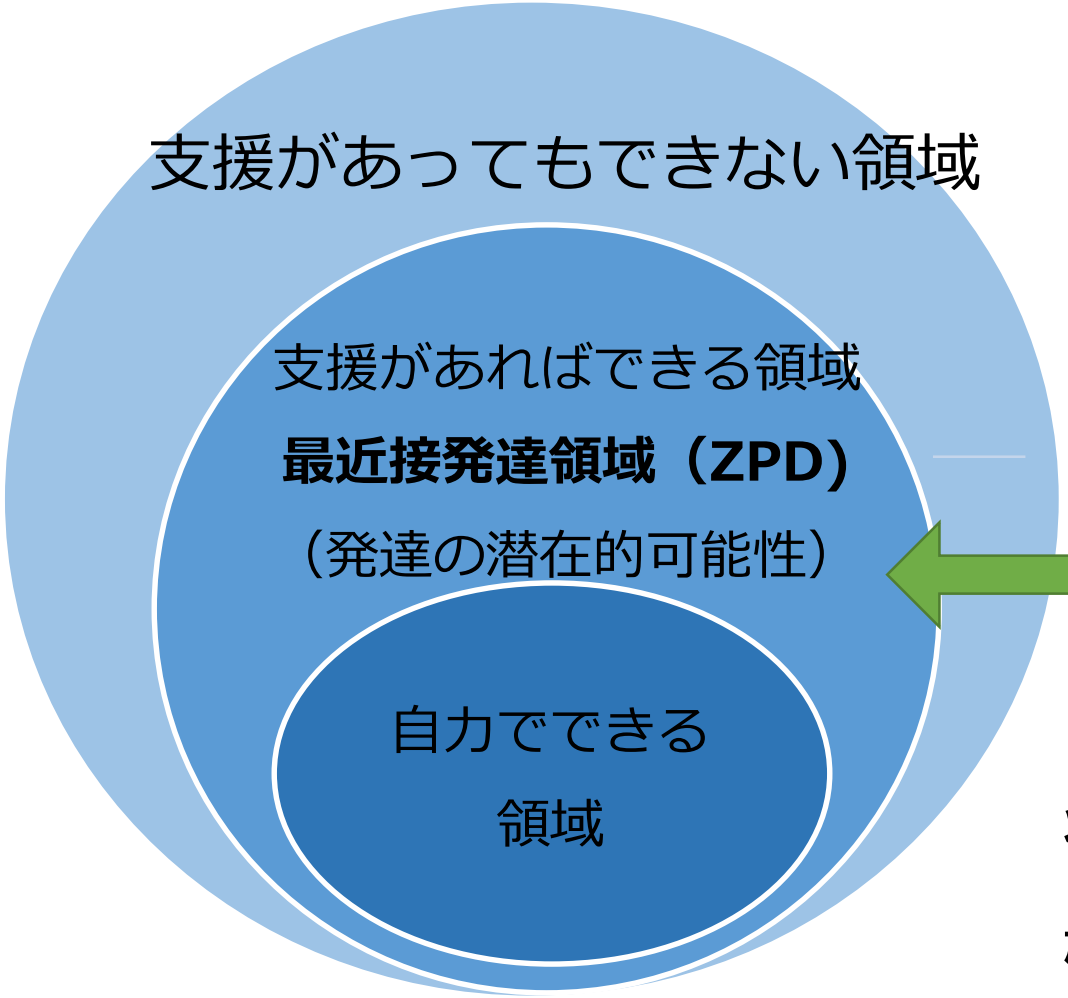
↓

- 5年前からコンセプトや教材を複数の大学の教員間でシェアし、授業を展開。

- 日本語教育で効果検証
  - 日本人対象基礎ゼミ：振り返りから4Cへの認識の変化を検証（奥野, 2016）
  - 留学生対象の日本語クラス：プログラム前後の作文を分析し、内容・言語面の向上を検証（奥野・佐藤，2016；佐藤・奥野，2017）
  - 留学生対象の日本語クラス：アンケートにより、内容面の定着・深化を検証（奥野・小林，2017）
- 日本語教師を対象としたCLIL入門本を出版（2018）

今後は、教師によるスキャフォールディングの役割を検討し、より多くの現場で共有できる教材を開発したい





スキャフォルディング
（Scaffolding）

将来的には学習者が自律的になり同じような課題を独力でできるようになるよう、学習者がさまざまな活動をするなかで教師が一時的に支援すること（Gibbons, 2002）

スキャフォールディングの例（Mehisto et al., 2008)

・学習者の既有知識やスキル・興味などを活性化する

・情報を学習者が取り入れやすい形で提示する

・異なる学習スタイルに対応する

・創造的思考・批判的思考を促すようにする

・少し上の難しいことでも取り組ませる工夫を行う

具体的な方法として（Guerrini, 2009)

- 質問する、既有知識を活性化する、モチベーションを高める、参加を促す、ヒントを提供する、フィードバックする
- 学習者に合った形に教材を適応することも含まれる

本発表の目的

- CLILを取り入れた「PEACE」プログラムの実践報告
  （大学学部レベル留学生向けの日本語教育）

⇒教材分析と授業記録の分析

（1）実践で使用した教材におけるスキャフォールディング
（2）授業中の教師によるスキャフォールディング
を考察する。

実践の概要

- テーマ　：「貧困問題を切り口に日本語を通して平和を考える」
- 回数　　：全14回
- 目的　　：現状を知り、説明し、考え、発信する日本語能力と
  学習スキルを養う。

実践の流れ（全14回）

1）　導入：地球の中で自分はどのような存在か

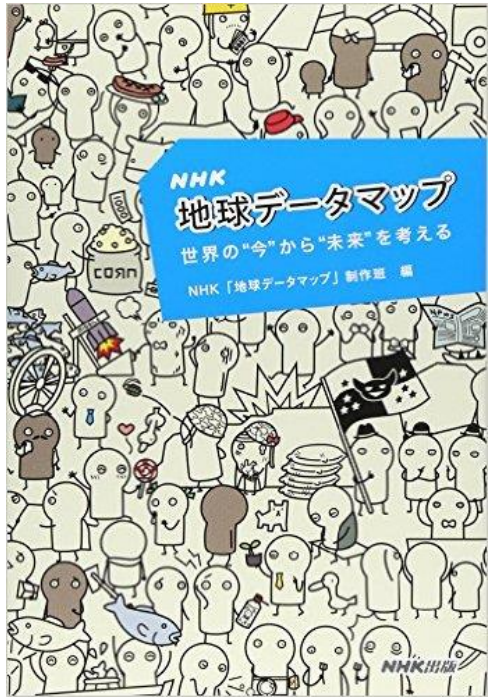
『地球がもし100人の村だったら』

2）　現状を知る：世界の貧困のメカニズム

・書籍や視聴覚教材で「モノカルチャー経済」を学ぶ。

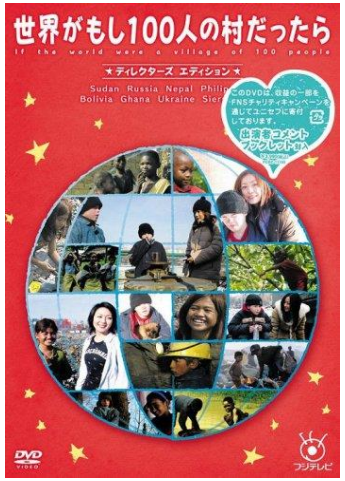
・一杯のコーヒーの内訳。

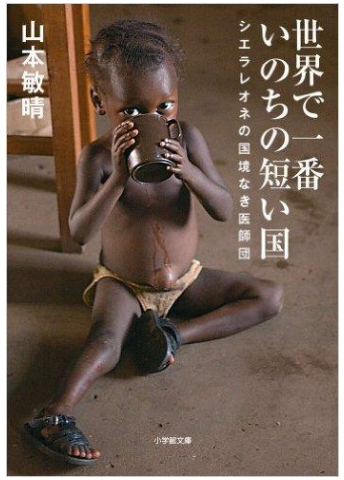
・貧困の背景・原因を絵を見て説明。



実践の流れ（全14回）

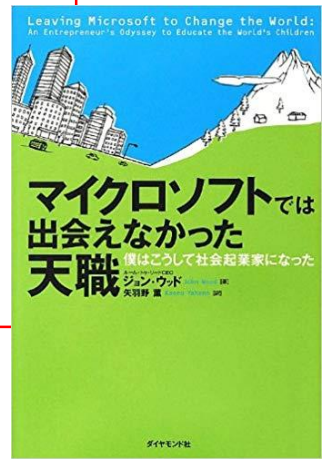
3）情報収集と分担読解
『世界で一番いのちの短い国』

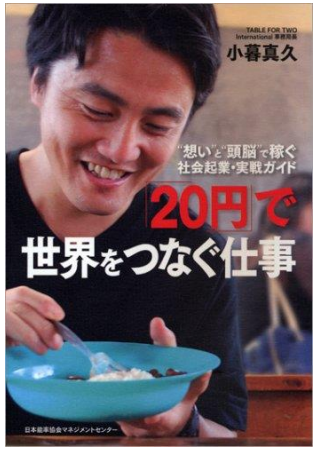


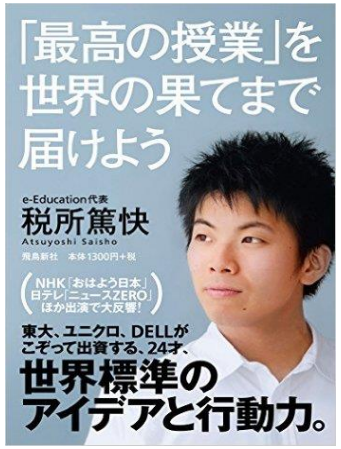


4）社会企業家や団体の取組みの紹介（口頭発表）
「貧困」を解決するための活動

（フェアトレード、教育支援、
食糧支援、遠隔教育支援など）







5）振り返り　―私たちにできること―
『ハチドリのひとしずく』

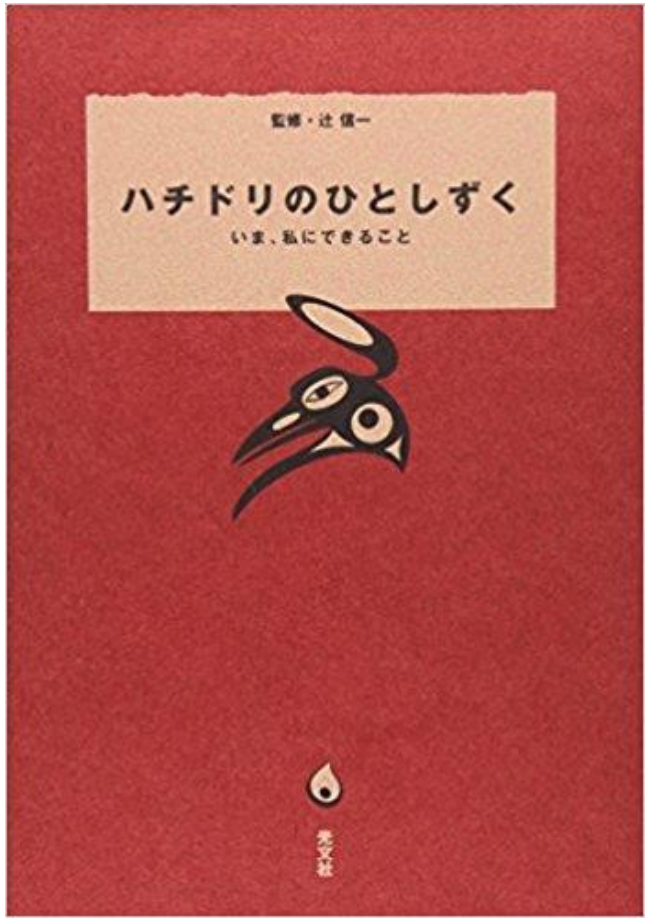
森が燃えていました

森の生きものたちはわれ先にと逃げていきました

でもクリキンディというハチドリだけは
いったりきたり
くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んで
火の上に落としていきます

動物たちがそれを見て
「そんなことをして
いったい何になるんだ」といって笑います
クリキンディは
こう答えました

「私は、私にできることをしているだけ」



分析方法

- 対象者　　：中国語母語話者20名、日本語母語話者3名

  ⇒日本語母語・非母語混合クラス

- 分析手段　：日本語教育用の自作教材の分析・TAによる授業の観察記録の分析・日本語学習者のポートフォリオによる分析

  ⇒ 日本語教育におけるCLILの教材開発へ向けて、学習者と教師にとって必要なスキャフォールディング（SF）とは何かについて考える。

ユニット１　「世界がもし１００人の村だったら」

ユニット１の４C

Content（内容）：①世界の現状と課題について知る。

Communication（言語）：
世界の現状や貧困に関する言葉を知り、資料を読む。
自分の意見を書く。

Cognition（思考）：①世界の現状と自分の現状を対比させる。
②世界の現状と課題を知り、貧困を解決するために必要なことや気をつけるべき点を列挙する。
③世界と自分の関わりに

2．読んでみよう　☞ワークシート

（1）まず、文中の（　　）に数字を予測 して入れましょう。

（2）次に、巻末資料のp.○○の答えを見てチェックしてください。

（3）一番おどろいた情報は何ですか。

（4）あなたはどんな村人ですか。どんな生活をしていますか。

（5）感想を友達と話し合いましょう。

思考面の深化を促す

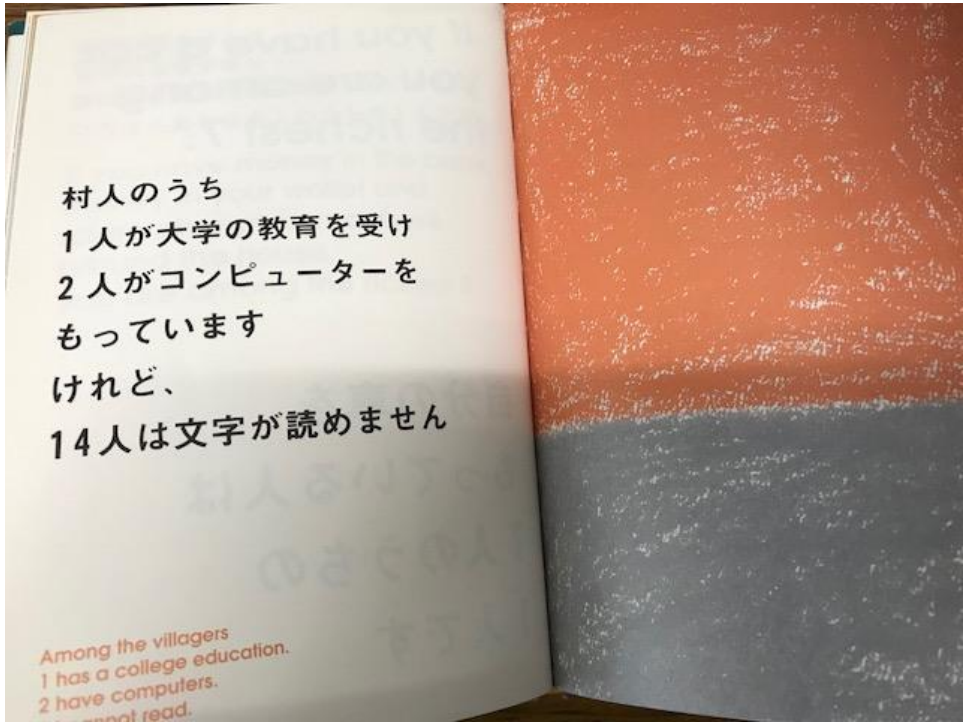
思考面の深化を促す

協学面

語彙やルビ以外の言語面へのSFはどうすれば？

拉致、非道

教師のFBによる日本語学習者の言語面での気づき



（３）一番驚いた情報は何ですか。

学習者：「１００人に1人だけ大学にいきます。」

ポジティブ？

⇒予測は２０人～５０人。
たった1人ということに衝撃を受けている。

このことを表現するには・・・？
教師FB：「～しか～ないを使って言えますか？」
↓
学習者「あっ、、、１００人に1人しか大学にいけません」

驚き・残念

表現したいことが伝わるような言語面のSFが重要

ユニット２　モノカルチャー経済と貧困
－貧困のメカニズムを知る－

貧困はどうして起こるので
ひんこん

ということばを知っ

として、貧困の原
ひんこん

「話してみよう」
（協学・思考面を促進）
気づきを与え、興味を喚起する

ユニット２の４Ｃ

Content(内容)：貧困の要因となる「モノカルチャー経済」を知る
ないよう　ひんこん　よういん

Communication(言語)：①貧困のメカニズムに関する言葉を知る
げんご　ひんこん

②貧困のメカニズムを説明する

Cognition（思考）：①貧困のメカニズムを理解し、なぜ貧困が　おきるかを認識する。
しこう

②他の学生の意見を知る。

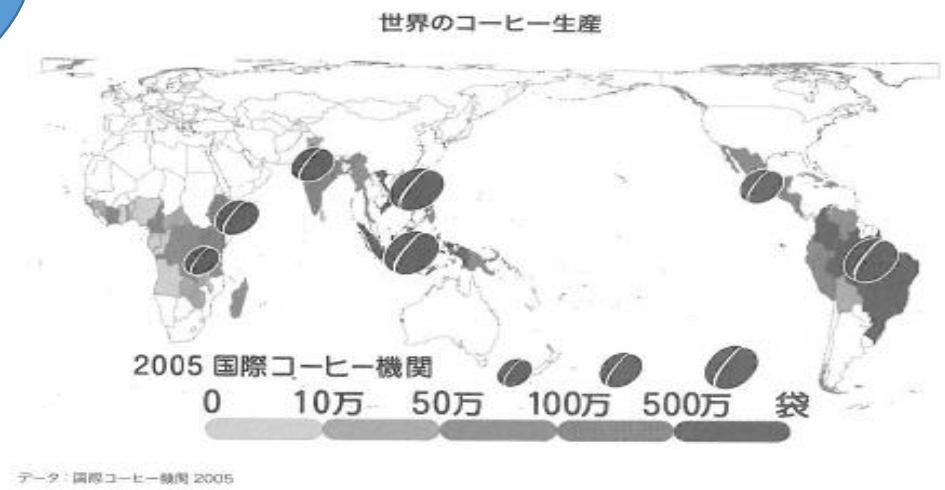
１．話してみよう

(1) みなさんはコーヒーが好きですか。お気に入りのカフェやコーヒーショップがありますか。
き　い

(2) コーヒーの原材料は何ですか。原材料の生産国はどこですか。
げんざいりょう　げんざいりょう　せいさんこく

(3) あなたがコーヒーショップで支払ったコーヒー代は、だれに支払われると思いますか。
しはら　しはら

例えば、330 円のコーヒー1杯を飲んだとき、お金はだれに、いくら支払われるでしょうか。
ばい　しはら



日本放送出版協会（2008）『NHK 地球データマップ　世界の今から未来を考える』，pp. 27，NHK 出版.

表にまとめる
（思考面を促進）

コーヒー1杯　330 円	
カフェ 小売業 者・輸入業 者	＿＿＿＿円
輸入業 者・貿易会社	＿＿＿＿円
コーヒー農家	＿＿＿＿円

「おいしいコーヒーの真実」http://www.uplink.co.jp/oishiicoffee/about_04.php

2「読んでみよう」
モノカルチャー経済

食料不足は干ばつなどさまざまな原因で起きるが、根本的な問
ぶそく　かん　　こんぽんてき
食べものを作れず、買
の貧困を生み出す「モ　　みがあ
ひんこん
の国々では、昔は飢えている人がほとんどいなかった。自分たちの村
う
らいの農作物は作ることができたのだ。しかし、これらの地域はヨーロッパ諸国
のうさくもつ　　ちいき　　しょこく
植民地にされ、自給 作物のかわりにコーヒーやカカオなど輸出用作物を大量に
しょくみんち　　じ きゅうさくもつ
培させられたり、鉱物資源を生産させられたりした。これがモノカルチャー経済
ばい　　こうぶつしげん
。独立後も途上国はさらにモノカルチャー経済に頼るようになった。人々は自分
どくりつ　　とじょう　　たよ
ちの食べものをつくるのではなく、コーヒーなどをつくって先進国に輸出し、そ
せんしん
収　入で輸入食料品を買うようになっていった。
しゅうにゅう
たとえばコーヒーの生産国を見ると、かつて植民地だった熱帯の途上国がほとん
しょくみんち　　ねったい　とじょう
だ。コーヒーなど輸出農産物や鉱物資源の値段は安いため、これらの国はいつま
のうさんぶつ　こうぶつしげん
たっても豊かになれなかった。そして農村で生活に困った人たちは、しかたなく
のうそん
会に出てスラムに住み着いたりすることになった。
かい

下ルビ
（言語面）

貧困のメカニズム
を知る
（内容・思考面）

(1)　昔、アフリカでは、食料不足が起こっていましたか。
ぶそく

　　昔、アフリカの人たちは、どうやって

　　カの人たちは、どのようなもの
　　ていますか。

内容理解を
促す質問
（内容面）

(4)　今、アフリカの人たちは、どうやって食料を手に入れていますか。

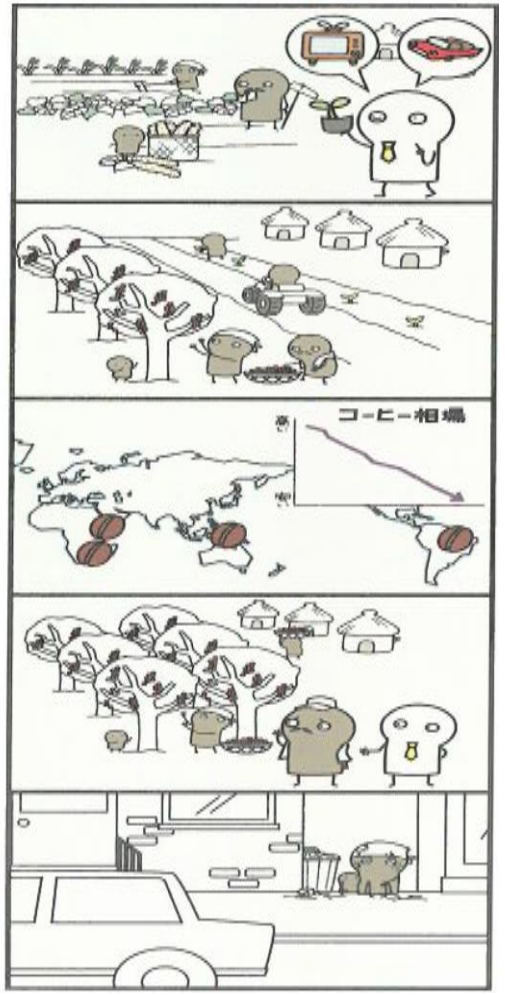
(5)　途上国の農村の人たちが生活に困るようになったのは、どうしてですか。
とじょう　　のうそん

キーワード
（言語面・内容面）

キーワード

先進国（せんしん）　途上国（とじょう）　植民地（しょくみんち）　輸出　輸入　農産物（のうさんぶつ）　鉱物資源（こうぶつしげん）

3　説明してみよう
モノカルチャー経済のしくみ



日本放送出版協会（2008）『NHK 地球データマップ　世界の今から未来を考える』，pp. 28，NHK 出版

Community
当事者として
考える

Community
世界につながる

・キーワード
活用例あり

キーワード

農村（のうそん）　都会（とかい）　栽培する（さいばい）　相場（そうば）　暴落する（ぼうらく）　スラム

4．書いてみよう　☞ワークシート

貧困（ひんこん）のメカニズムについてまとめてみましょう。また「モノカルチャー経済」についてあなたはどう思いますか。書いてみましょう。

5．話し合ってみよう

「モノカルチャー経済」についてあなたはどう思いますか。「4．書いてみよう」をもとに、話し合いましょう。

もっと調べてみよう

（1）①②について調べてください。わかったこと、考えたことをクラスで発表しましょう。

① あなたの身近（みじか）にあるもので、途上国（とじょう）　から輸出されているものがありますか。その商品（しょうひん）はどこで、どのように作られていますか。調べてみましょう。

② 世界では、どのような国がモノカルチャー経済に陥（おちい）っていますか。その国では、どのような問題が起こっているでしょうか。

（2）DVDを視聴（しちょう）してみましょう。感想を話しましょう。

…だったら』（2012）ボニーキャニオン

…しいコーヒーの真実』

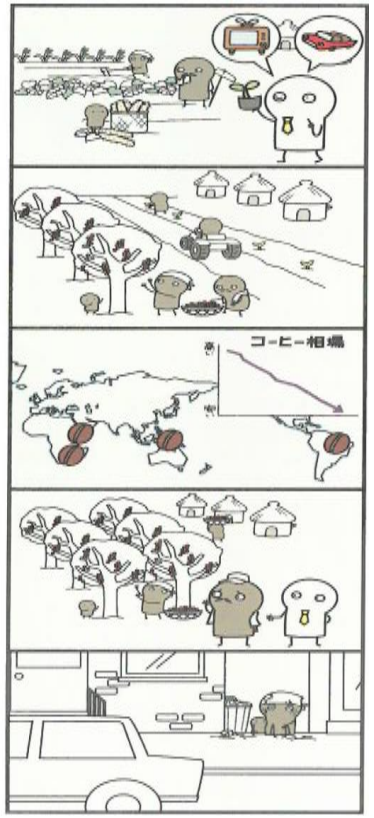
教材でのスキャフォールディングの検討（登場人物SFなし

村人の中の人間関係には言及されていない。

ユニット２

３．説明してみよう

下のマンガを見て、「ポレポレ村」で起こった出来事についてのストーリーを考えてください。グループやクラスで説明してください。



日本放送出版協会（2008）『NHK 地球データマップ　世界の今から未来を考える』，pp. 28，NHK 出版.

キーワード

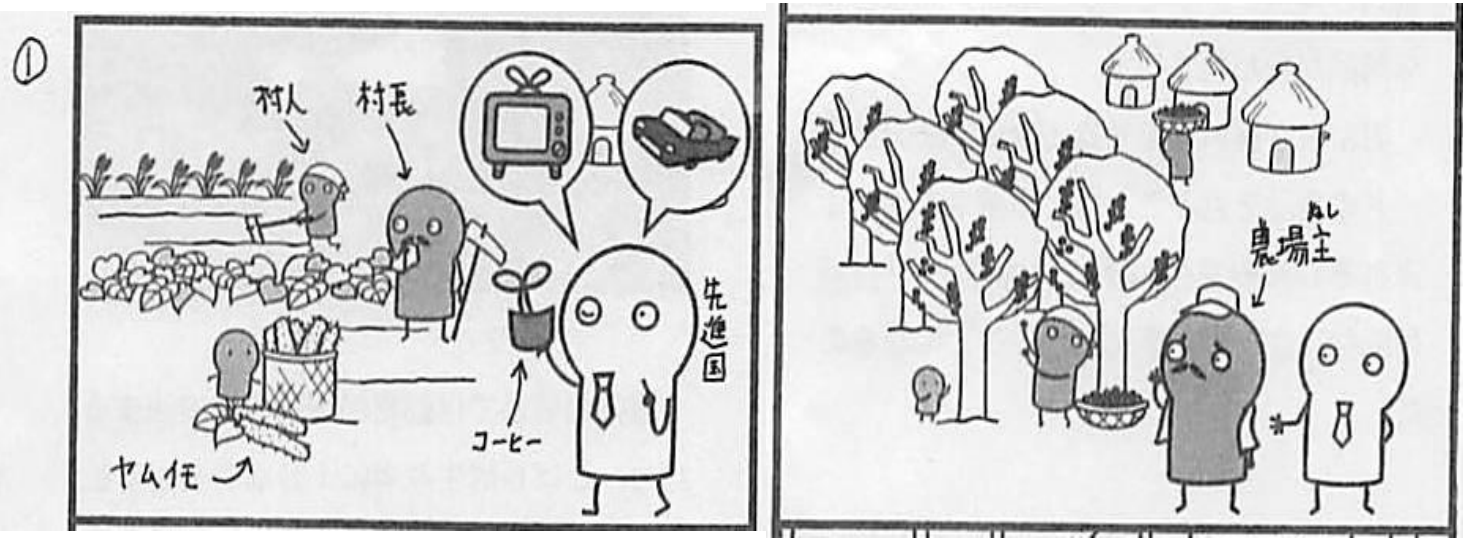
農村（のうそん）　都会（とかい）　栽培する（さいばい）　相場（そうば）　暴落する（ぼうらく）　スラム

ある「ポレポレ村」という農村に人々が食糧を生産して、自給自足しています。ある日、先進国の人はそこに来てから、市場調査をして、コーヒー豆を生産したいです。それからポレポレ村でコーヒー豆の生産が始まり、生きるために、村の人々さらに子供も働いています。

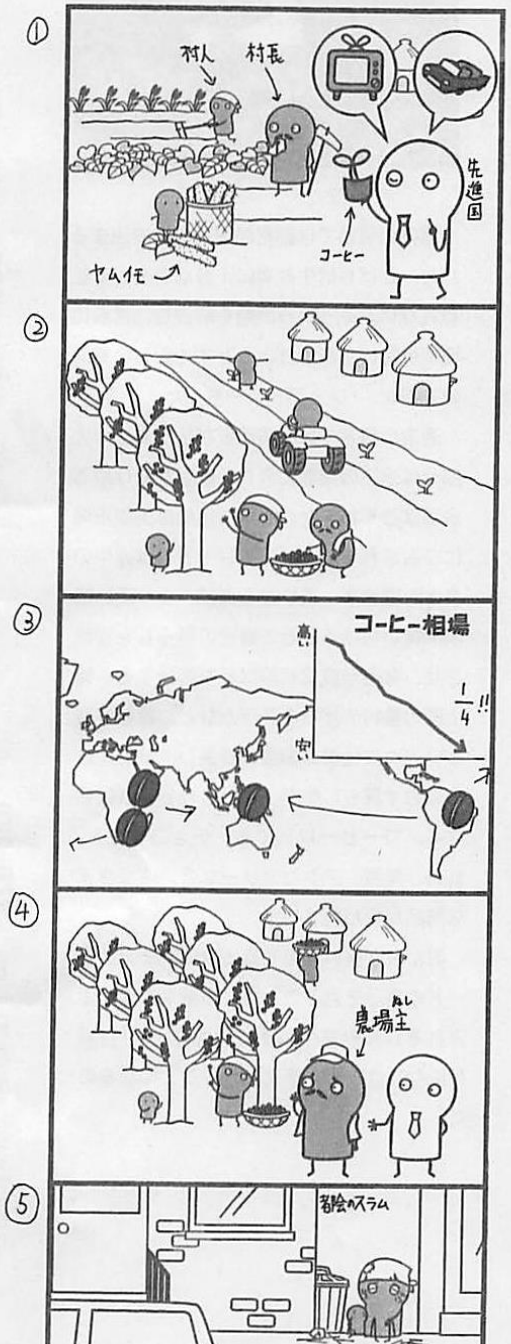
その後、世界中にコーヒー豆の生産地がいっぱいなりました。すると、コーヒー相場が下がっていきます。コーヒー市場の不況でたくさんの労働者が解雇されました。また、昔の農業団地もなくなりました。村人の生活が苦しんでいます。

村人はいきるために、都会に出て、スラムに住んで、貧しい生活を送っています。

スキャフォールディング有
（図に登場人物を記載）



ポレポレ村が貧しくなったわけ



登場人物を記載した場合の例

村人の中に雇用関係が
生じたことに気づいた。
→内容の深まり

①ポレポレ村の人々が昔からずっとヤムイモなどいろいろな農産物を作って、自給自足の豊かとは言えないけど、幸せの生活を送っていました。ある日先進国からネクタイをしている人が現れて、村長に「もし、コーヒー豆を植えて私に売ったら、きっとすげーもうけるようになる、そしてテレビも車も夢ではない！」
②村長はその話を信じて、皆にこのような大金を儲けるチャンスはとてもありがたいことだとすすめた。
（中略）
③は、キャイ[illegible]った給与だけで[illegible]にして、かれ[illegible]念だったが、[illegible]つからなかっ[illegible]った。

教材へ登場人物を明記することにより、理解しやすくなる。
教材上での学習者へのスキャフォールディングとして有効。

ストーリーテリングでの学習者のことば

・日本語学習者A　　＊村に住まなくなりました。

自分の意志

・日本語学習者B　　＊結局、スラムにしか住まなくなりました

A ⇒　村に住めなくなってしまいました。

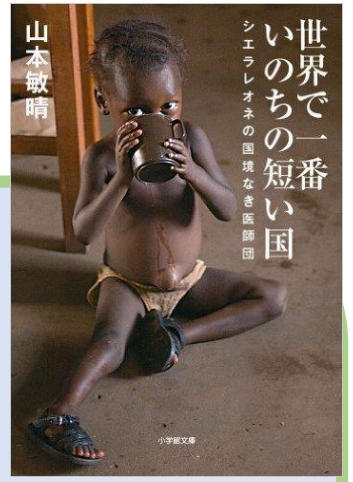
B ⇒　結局スラムに住むしかなくなりました。

仕方なく

言語面へのスキャフォールディング
→「表現意図が表現できていない部分」×「既習だが使えていない」

教える教師への支援をどうするか
→FBのポイントをどう示すか（課題）

(4)口頭発表後のグループディスカッション
→全体へ報告



ディスカッションポイント

①本当に意味のある国際協力とは何か（性器切除などの現地の文化はどうしたら良いか？）。

②旅行・恋愛など様々な理由で国際協力に参加するのは正しいと思うか。

教師のフィードバックによる言語面の気づき

グループ	グループディスカッションの内容を報告
1	①「現地の文化を尊重した上で何ができるか考える。」 ②「間違いじゃない、正しいと思います。現地を見ることで、何ができるかということにつながる。コミュニケーション力・チームワーク力が上がるので、良い経験になると思います。」
教師のフィードバック：「「～と思います」と言ってしまうと、Aさん個人の意見になってしまう。「～という意見がでました」などと言うと良いですよ。」	
2	①「文化尊重、でも死亡率が高いので、教育をちゃんと行うべきという意見です。」 ②「目的は違っても、結果として人を助けたということです。」
3	①「文化を理解した上で協力するということです。」 ②「結果的に助けたらそれは良かったと思います。最初からだと「正義の味方」みたいな人。普通の人は、いろいろ経験したいと思ってシエラレオネに行く。」

自分の意見かグループの意見かを区別する話し方に着目する必要性。

CLILがインプット、アウトプット、インタラクションの豊富な言語環境を作り出し、その中で、フォーカス・オン・フォームがL2習得モデルに沿って言語学習をサポートしていく（和泉2016）

まとめ：教材への反映について

・教材で：思考の深まりを可能にするタスクや問いの設定を行う。
学習者の興味を喚起させるような内容や協学を促進させるような活動を取り入れる。言語面はルビのふり方やキーワードの提示の他に活動の中で見えてきた教師によるSFも取り入れていきたい（どうやって？）。

案として

→教室活動のFBや協働学習の過程についての研究成果を、
FB,SFのポイントとして教師用指導書のような形で示す。

→紙面の両端のスペースを活用して、SFのポイントを教材内を入れ、
オプションとして活用できるようにする。

→言語項目やスキルを直接提示するのではないが、活動をより深めるために必要な情報も検討する（例「登場人物を示す」）。

今後の課題

- 実践を通して、学習者と教師の行動を観察し、学習者と教師に必要なスキャフォールディングをいかに教材に取り入れていくかを考えていく。

- 日本語レベルの異なる教材の開発

参考文献

1. 和泉伸一(2016)『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』アルク
2. 奥野由紀子「日本語母語話者へのCLIL（Content and Language Integrated Learning）の有効性の検討－大学初年次教育履修生の変容に着目して－」(2016)『日本語研究』第36号pp.43-57.
3. 奥野由紀子・小林明子(2017)「世界の平和と貧困問題をテーマとした内容言語統合型学習（CLIL）の実践」『The 23rd Princeton Japanese Pedagogy Forum PROCEEDINGS』, pp.176-185.
4. 奥野 由紀子・佐藤礼子（2016）「ライティング評価による内容言語統合型学習（CLIL）の有効性の検討」, International conference of Japanese language education.
5. 奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・渡部倫子 (2018)『日本語教師のためのCLIL入門』凡人社
6. 佐藤礼子・奥野由紀子(2017)「ライティング評価による内容言語統合型学（CLIL）の有効性の検討「PEACE」プログラムの実践を通して」『第二言語としての日本語の習得研究』第20号, pp.80-97.
7. 縫部義憲 (2009)「教育で『愛』を語る」『最終講義資料』 2009年2月7日、於広島大学.
8. 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011)『CLIL 内容言語統合型学習　上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第1巻　原理と方法』上智大学出版.
9. Coyle, D., Hood, P, & Marsh, D. (2010). CLIL: Content and language integrated learning. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
10. Gibbons, P. (2002). Scaffolding language, scaffolding learning: Teaching second language learners in the mainstream classroom. Portsmouth, NH: Heinemann.
11. Guerrini, M. (2009). CLIL materials as scaffolds to learning. In D. Marsh, P. Mehisto, D. Wolff, R. Aliaga, T. Asikainen, M. Frigols-Martin, S. Hughes, & G. Langé (Eds.), CLIL practice: Perspectives from the field (pp. 74-84)
12. Mehisto, P., Marsh, D., & Frigols, M. (2008). Uncovering CLIL: Content and language integrated learning in bilingual and multilingual education. Oxford: Macmillan.

ご清聴ありがとうございました。

奥野由紀子　yukokuno@tmu.ac.jp
佐藤礼子　sato.r.ae@m.titech.ac.jp